

にひょうう えもん

二俵右衛門さん

(藤江)

むかしの農業は、力仕事ばかりでしたので、

力が強いということは、百姓にとって大切な

条件でしたし、誇りでもありました。それで、

村の評判の娘さんのいる家には、若い衆が出

かけて行って、おやじさんの夜なべ仕事を手伝

い、俵などのかつぎ会をしたんだそうです。

娘さんの心をつかむ前に、まず、そのおやじ

さんに気に入られようとしたのです。すもう

大会などもよく行われました。そして、すもう

の強い力持ちの若者が、村の娘さんたちのあこ
がれの的となったのです。

むかし、藤江に二俵右衛門さんと呼ばれる

力持ちがいました。

「どのくらい強いかって？」

「俵を一俵ずつ、片手でさし上げることくら

い朝めし前さ。」

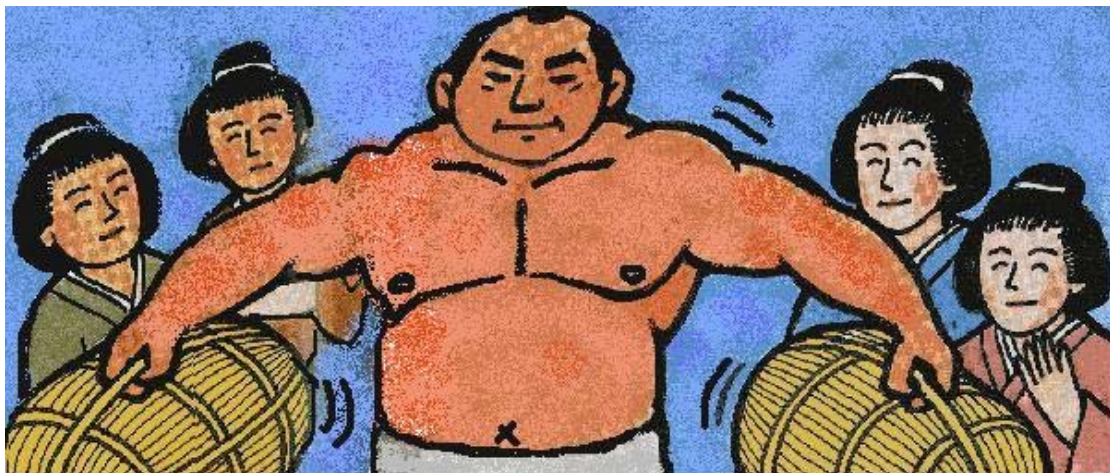
「それどころか、二俵いっしょにかつぐことも

へっちやらでな。」

「それで二俵右衛門の名がついたのかい。」

「さぞかし娘っ子にもてたんだらうに。」

「あつたりまえさ、
村いちばんのべ
つぴんをもらっ
たそうだ。」
「すもうも強かつ
ただらあず。」
「そりやもう、村
ですもうがある
時にや、いつで
も優勝だった
そうだ。ほうび



に長持ちがもらえると、片手がかついできた
というぜ。」
「長持ちぐれえなんだい。新田づくりをすると
きなんか、小石のいっぱいつまった俵をどん
どん運び込んで、干潮の間にすっかり堤防
を築いちまったというのでう。」
どこの村にも、力持ちの人は、一人や二人い
たものですが、二俵右衛門さんほどの力持ちは、
めったにいなかったといひます。